中心担う学生リーダー育成を

阿波踊り 支えていくには

高校生・大学生が徳島市長に提案

少子高齢化が進む中、「阿波踊り」をどう支えていけばいい？　徳島市立高校の生徒と甲南大の学生が考えた解決策を、徳島市の内藤佐和子市長らを前に発表した。実際に運営ボランティアに参加した体験なども盛り込んだ具体的な提案だ。

10日に同市のとくぎんトモニプラザであった「ソーシャルビジネスチャレンジ」（徳島市主催）の中間報告会。SDGsの17の目標を切り口に、甲南大生と地元の高校生が地域の課題の解決策を考えるイベント「関西湾岸SDGsチャレンジ」（主催＝甲南大学、朝日新聞社メディアビジネス局）に取り組んだ生徒と学生8人が発表した。

イベントに取り組む中で、8人は「阿波踊り」に注目。今年8月、祭りを運営する担い手不足の背景を探るため、阿波踊りの開催を支えてきた両国本町商店街や、NPO法人「green bird」の徳島チーム代表の岸田侑さん(39)らに取材。ボランティアを長期的、安定的に育成するシステムを設計することが必要だと知った。

そこから8人が考えたのが、「若者ボランティア育成事業」だ。地元の高校生や大学生をNPOなどに受け入れてもらい、中心的な役割を担う学生リーダーを育てる。リーダーは県内外の学生らにボランティアの参加を呼びかけ、若者を活動に巻き込む仕組みだ。

8人のうち4人は、実際に阿波踊り当日のボランティアも体験した。徳島市が募集した「公式アンバサダー」として観客の整理をしたことや、「green bird」の徳島チームで、ごみブースを設置したことなどを話した。

「やりがいを感じられるかどうかも含め、ボランティアの受け入れ態勢にはばらつきがある」と報告した。

内藤市長は、祭りの運営を若い世代が担うことについて、「自分もやりたかったこと」と評価。そのうえで、「大規模イベントの運営では、ボランティアとアルバイトで活動内容のすみ分けのバランスが難しい。みんなの声を聞きながら、どういうボランティアの形が良いのかを考えていきたい」と話した。

甲南大経営学部2年の下山翔矢さん(19)は「自分たちが温めてきたアイデアを現場に届けられた。運営に関わったことがない若い世代の市民の声を聞いて反映させたら、さらに良い仕組みになると思う」と話した。

（高井里佳子）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。